

⑨ 日本国特許庁 (JP)

⑩ 特許出願公開

⑫ 公開特許公報 (A)

昭59—137415

⑤ Int. Cl.<sup>3</sup>  
A 61 K 33/10  
C 01 F 11/18

識別記号  
ADD

庁内整理番号  
6675—4C  
7106—4G

⑬ 公開 昭和59年(1984)8月7日

発明の数 1  
審査請求 有

(全 3 頁)

⑭ カルシウム剤

327

① 特 願 昭58—9757

① 出 願 人 小野田実

② 出 願 昭58(1983)1月24日

静岡県榛原郡吉田町住吉5436の  
327

③ 発 明 者 小野田実

④ 代 理 人 弁理士 加藤静富

静岡県榛原郡吉田町住吉5436の

明 細 書

1 発明の名称 カルシウム剤

生涯気をいうようですが、このふんでは日本の  
将来が案ぜられてなりません。

2 特許請求の範囲

健康を損なわせている原因は、いろいろさま

卵殻を乾燥して細かい粉末にしたもの、この  
粉末を成形したものを使用することを特徴とし  
たカルシウム剤。

ざまですが、なかでも最も重要な原因として私  
が指摘したいのは、日本が火山列島で、火山灰  
におおわれた土壌に住んでいるため、日本人全  
般についていえるアルカリ性のミネラルの不足  
です。とりわけ、アルカリの代表、カルシウム  
が、日本人には足りません。欧米人の食事を模  
倣してとり入れたため、逆にとりすぎているの  
が、酸性の食品なのです。

3 発明の詳細な説明

本発明は、卵殻を低温で細かい粉末にし、こ  
の粉末か、粉末を成形したものを使用するカル  
シウム剤に関する。

明治中期から日本に入ってきたヨーロッパの  
栄養学は、アルカリ土壌に生活するヨーロッパ  
人種に適する栄養学で動物性たんぱく質と油脂  
を高く評価し、日本人の体質の小さいことを卑  
下し、ヨーロッパ人並みになろうとして、洋風

「 近來一般の方に、とがく疲れやすい、血圧が  
高い、がんばりがきかない、内臓に故障がある、  
そういった悩みを訴える人はふえる一方です。  
以前は老人に多かった高血圧、心臓病などのい  
わゆる成人病が今は若い人たちにも急に広がっ  
ています。

食事をすすめてきました。日本民族の先祖がその経験と知恵で、カルシウムなどのアルカリ性ミネラルを多く含む海藻や小魚や青野菜をとっていたのに、今はそれが減っています。したがって、日本人の体質は酸性化に傾いているわけです。」と川島西郎博士がその著書「アルカリ食健康法」で述べられる通り、日本人の体質が酸性化したため、一般に前述のような疲れやすさ、高血圧、がんばりのきかなさ、気衰の故滅など多くなり、又、子どもは骨や歯の発育により、骨折や虫歯が異常に増加する憂慮すべき事態にあります。しかし、日本人の食生活は完全に欧米風化しており、海藻、小魚、青野菜等は献立にのることが少い。

このため、これらアルカリ食は食べず嫌いの状態になっており、今更に必要な栄養素であるから

用で細胞の働きが活発化されるため、健全な身体が得られる。しかし、従来廃棄物としていたものを食用とすることは慣習的に大きな抵抗があり、また、卵殻は硬くてそのままでは食べにくいので、カルシウム剤として一般利用されていない現状である。

本発明はこの現状に即してなされたもので、卵殻を乾燥してから細かく粉砕し、純白の微粉を得てこの粉末をそのまま使用するか、或は粒状などに成形し、この成形品を使用することにより、卵殻より得たカルシウム剤を現在市場提供されている各種の栄養剤同様に普及させ、日本人の食生活の欠陥をこれにより補わせて、酸性化により前述した通りの弊害を生じている日本人の体質を弱アルカリ性に転換し、健全な身体と安定した精神を営むカルシウム剤を提供す

食べろとすすめても食べない。従って、一般人にも子供にも不足しているカルシウム等の栄養素を必要量とらせ、日本人の体質を酸性から弱アルカリ性に転換して、健全なものにしようとしても、その願いはかなえられなかった。

そこで、前述の卵殻、小魚、青野菜の他にカルシウムを多量に含むものを調べると、現在中身の卵黄と卵白だけを食用にしている卵の殻が、なんと75%の炭酸カルシウムを含むミネラル源であり、カルシウムの他にも15%の炭酸マグネシウムと、0.8%の磷酸を含み、且つ、3.3%のたんぱく質も含んでいて、然も、大腸菌中にラムダファージ、デオキシリボ核酸が存在する生きた菌である。

従って、この卵殻を食用すれば、日本人に不足するカルシウムが充分にとれ、生きた菌の作

ることを目的とする。

次に本発明に関するカルシウム剤の詳細について説明する。

原料とする卵殻は、カルシウム等のミネラルが変化せず、生きた菌が活性を有していなければならないから、生卵を割って（孔をあけても良い）の中身、即ち卵黄と卵白を取出したなるべく活きの良いものを用い、この卵殻をぬるま湯か米を内いてきれいに洗滌し、品温を80℃以上には上げないように乾燥する。（乾燥温度を上げ過ぎると生きた菌の死滅とカルシウムその他のミネラルの変化を生ずる。）

次に乾燥した卵殻を複数種の粉砕羽根を備える微粉機の粉砕筒内へ投入し、粉砕羽根を3600rpmの高速度で回転させて、約1/3分間粉砕を行う。このときも摩擦熱などにより品温が

80度以上に上らない様に注意する。そして粉砕を終れば、粉砕機から別設の粉末を取り出し、これを300メッシュの篩にかける。その結果、85%が篩を通り、純白の微粉末のカルシウム剤が得られる。また篩上に残った15%の粗塊は粉砕機に掛けて再粉砕すれば、総て製品となる。

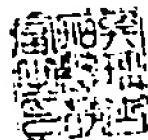
こうして得られたカルシウム剤は、そのまま小さじにすくって飲用するか、オブラートに包んで飲用すれば、薬や栄養剤と同様に腸液より得たカルシウム剤を抵抗なくとって身体に吸収させ、肉や油脂のとりすぎによって酸性化している体質を弱いアルカリ性に転換させ、身体各器官を順調に働かせ得るから、体調はすこぶる良好となり、疲れず、血圧は正常であって、がんばりもさき、内臓の故障もない健全な身体が

ない果汁に加えると飲料がミネラル化されると共に、生きた菌が果汁中の酵素の発酵を促して高カロリー飲料とするため、この飲料を飲用すれば、カルシウムなどのミネラル補給と同時にカロリーの補給ができる。

次にこのカルシウム剤は前記した通り80度以下で処理使用することが好ましいが、煮炊温度80度程度では、カルシウムの変化は認められないから、粉末または粒状のものを、飯を炊く時、或は菜を煮る時などに加えてもカルシウム補給の目的が達成されるものである。

尚、このカルシウム剤せう取による体質の転換の効果は、早急に現われるものではないので、本発明の実施例に付いては後日補充します。

特許出願代理人 加藤 清



培われ、これにつれて精神も安定してゆとりある生活が楽しめる様になる。このようなカルシウム剤の飲用は歳に高熱が作用しないため、ミネラルの熱変化が起らず、生きた菌が活性を有して細胞に作用し、細胞の働きを助長する効果があるもので、この効果は粉末の飲用のみに留まらず、粉末を80度以上の温度を掛けない手段により顆粒状か、錠剤型などに成形して飲用する場合も奏される。

また粉末のカルシウム剤は、単独又は調味料、香辛料、ふりかけなどに混合して、菜や飯にふり掛けてとることもできるもので、この場合も効用は飲用する場合と同じである。但し、混用の場合は、ビタミンDを混用してカルシウムの吸収効果を高めるのに好都合である。

更に粉末にしたカルシウム剤は、高温殺菌し